

## 東南アジア文学の今 《インドネシアのメガ・ヒット小説》

——作者アンドレア・ヒラタが語る『虹の少年たち』の世界——

報告 青山亭

一月一日に総合文化研究所においてインドネシアから来日した作家アンドレア・ヒラタ氏による講演会が開かれた。インドネシア流にアンドレア氏と呼ぶが、彼は一九七六年にスマトラ島に近いブリトウン島で生まれ育った。自分自身の経験にもとづいた、腕白な子どもたちと教育に情熱をかける田舎の小学校の女性教師の苦勞と喜びを描いた処女作『虹の少年たち』(Laskar Pelangi)は、二〇〇六年に出版されると五〇〇万部という破格のベストセラーとなった。二年後の映画化作品も大ヒットを記録した。原題は「虹の戦士たち」の意で、「戦士」は「腕白子ども団」といった程度の意味である。もともと出版する意図も無く書かれた原稿が、友人の手で出版社に渡されたのがそもそもの発端という。

昨年一二月に総合文化研究所で日本語版出版を記念して翻訳者の福武慎太郎氏と加藤ひろあき氏による講演会を開催したことが縁で、今回の講演会につながった。アンドレア氏のほか、翻訳者の加藤氏、テレビドラマ版の主題歌を歌ったメダ氏の三人が本学を来訪した。ゲストを迎える総合文化研究所では、五十名を超える聴衆が満員の部屋で三人を迎えた。講演会の前半では、出版にまつわるエピソードや世界二十カ国に及ぶ翻訳版の出版などについて、アンドレア氏がインドネシア語で語り

加藤氏が日本語に通訳するという形をとった。後半では、メダ氏の情感のこもった歌唱や、加藤氏との息の合ったデュエットが会場を熱気に包んだ。参加者の質問にアンドレア氏が丁寧に自身の気持ちを吐露していたのも印象的であった。講演が終わったあとも、参加者とゲストとの懇談で、高揚の余韻はなかなか収まらなかった。

ヒラタという名前は日系のような錯覚を与えるが、これは「来世」を意味するアラビア語に由来する現地語である。アンドレア氏の郷里はマレー文化圏に属し、ムスリムが多数派を占める。一方、アンドレアという名前の由来も興味深い。マレー社会では、子どもが大病を患ったりすると、験を担いで名前を変える習慣があり、アンドレア氏も生まれてから何度も新しい名前を付けられた。しかし、どの名前もうまくいかず、ついにさじを投げた母親から、今度は自分で付けなさいと言われたときに選んだのが、開いた雑誌のページに出ていたアンドレアという名前だったそうである。親はイタリア人の名前ということに驚いたようだが、アンドレア氏はすっかり気に入って、以来この名前を名乗っているとのことだった。

このエピソードが伝えるように、アンドレア氏には小説の主人公と同じような自由人の雰囲気がある。マレー社会には語り

部が延々と物語を語るパントウンという口承文芸の伝統がある。脇道のように語りが広がっていく自由闊達な語り口は『虹の少年たち』の特徴であり魅力でもあるが、アンドレア氏自身が現代の語り部を任じていることを知り、その背景がよく理解できた。また、英語版は国際市場を意識して書き直した原稿からの翻訳であり、日本語版を除く各国版はいずれも英語版からの重訳ということであった。それに対して、オリジナルのインドネシア語版から直接訳したのは日本語版のみということだ。日本語版に特別な思いがあることも、アンドレア氏の言葉からよく伝わってきた。翻訳者の加藤氏が本学出身であることを思うと、日本と世界を結ぶ本学の役割を改めて実感させられた講演会でもあった。